

ex をつけて挿入してもよい” から来ている。またその例に、*Gossypium tomentosum* SEEM でも *Gossypium tomentosum* NWTT. ex SEEM でもよい。*Lithocarpus polystochya* (A. DC) REHDER でも *Lithocarpus polystochya* (WALL. ex A. DC) REHDER でもよい、というのが出ている。

これから、ex の使い方も、また、省略したいときは ex の前の人名は省いてもよいことがわかる。特にリスト作りのときなど行数を増やさなため、どちらか一方を省きたいときも多い。間違っても ex のあとの著者名を省略してはならない。

3. 括弧の中の命名者名 *Navicula radiosa* Kütz. var. *tenella* (BRÉB. ex Kütz.) GRUN. という変種名はずい分と長い。どうせリストだから括弧の中を省いてしまおうかと考えるのも人情というものである。しかし、長くなるからという理由で切り捨てるわけにはいかない。第59条に“属またはそれ以下の階級の分類群で、小名の変更をしないでその分類上の階級を変更したとき、原名の著者名は括弧でくくって残さな

ければならない”と明記されている。すなわち *tenella* という小名の原名は *Navicula tenella* BRÉB. ex Kütz. である。従って、これが *N. radiosa* の変種に GRUNOW によって階級替えをさせられてもその著者名である BRÉB. ex Kütz. または Kütz. は括弧の中に入れて残さなければならぬのである。また「小名の変更をしないで」という断り書きも気になる。上の例で、*Navicula tenella* のタイプを調べ、これが *Navicula radiosa* の種の範囲に入るから、その var. に落とそうという場合、すでに *Navicula radiosa* に var. *tenello* の名称が出版されてしまっていたということもあり得ることである。そのようなときは、*tenella* の小名は使えないので新しい小名 (nom. nov.) を付けなければならない。この一文はこのような場合を考えての断り書きと解してよい。

以上で当初の予定の私なりの解釈を終ったのであるが、何分にも私にとって命名規約はほとんど独学に近いので、誤解その他お気付きの点については何んなりとご教示いただきたい。(東学大・生物教室)

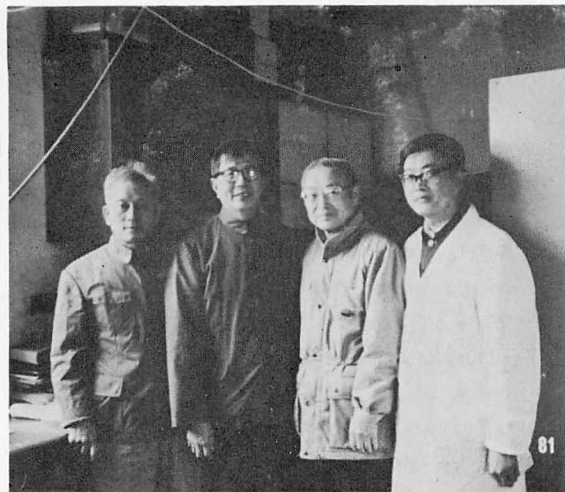
西澤一俊：中国を訪ねて (2) Kazutosi NISIZAWA: A short visit to China (2)

黄海水産研究所は、海洋研究所から車で3-4分の処にあり、1937年創立され、350人の職員のうち186人が研究員。主任3人(大学では教授に当る)、副主任15人(大学では助教授に当る)、普通の研究員(大学では講師および助手に当る)93人。基礎研究、漁労、環境保護、遺伝育種、増養殖(水産動物や海苔、昆布、*Macrocystis* などの試養殖を含む)、漁業経済、資料情報、加工、などの8部門の研究部門があり、378トンの船2隻をもつかなり大きい試験場である。日本に一昨年招待され各水産試験場を視察して歩いた過紹武氏(アルギン酸の研究などもしている)や加工主任の張廷序氏が、研究所内を一通り案内してくれた。エビの養殖の研究には特に力を入れているようで、したがってその餌料の研究など熱心にやっていた。色々と研究員の侯文捷氏と話しているうちに、餌の結合剤の問題になった。私もこれには関心があるので種々話合ったが、ここではアルギン酸のほかにポリビニルアルコール(PVA)なども試みており、後者のみでは死亡率が高いという。恐らくPVAに混入していると思われる単量体の害ではなからうか。この研究所の化学

研究室では、マンニトール、アルギン、沃素などの製造研究をしており、アルギン酸標品の規格検定法には困っていた。

青島での最後に、第二海水養殖場の中にあるアルギン酸製造工場を見学した。朱念燧工場長と呉副工場長が案内してくれたが、あとで何か製造工程につき意見があったら言って欲しいとのことで、一生懸命みた。最初富士化学の技術陣が指導して作った工場だとのことで、日本の二三の工場とよく似たやり方であった。しかし原藻からの抽出後の滷過工程が余り良くなかった。とにかく青島で養殖するコンブの全部をアルギン酸製造に使っているというだけに、残渣を棄てているのが惜しい。工員は300人ぐらいで、一見全力を挙げて働いているようにみえた。この養殖場では、このほかイカ、アワビ、ホタテガイ、エビなどの養殖をやっており、全体では1000人からの従業員がいる。この工場では製造されているアルギン酸はすべて日本に輸出しており、月産20トンもあり、キロ当りの原価は1700円位とか。

青島から約25時間軟座車に揺られて上海に着いたの



科学院植物生理学研究所の光合成グループ。
左端：邱国雄研究員，その右隣：施教耐主任，右
端：魏家綿研究員。

は、11月4日昼近くであった。3日間の滞在のうち、1日がかかりで科学院の植物生理研究所を訪ねた。最初 *Rhodospseudomonas capsulata* (光合成細菌) を用いて目下ニトロゲナーゼやフェレドキシンの研究をしている宋鴻遇部長の出迎えを受け所内の概要を説明して貰った。私は主として光合成グループの仕事を詳しく聞き、あとは一通り見学することにした。*Anabaena cylindrica* の N_2 固定条件を研究している陳氏が、この藍藻を利用して米の増産をしようという夢物語りを話してくれたのは印象的であった。光合成グループの主任施教耐氏はスライドや図版を用意して、*Sorghum* (キビ、 C_4 植物) とコムギ (C_3 植物) の炭酸固定酵素ホスホエノールピルビン酸 (PEP) カルボキラーゼの比較研究を説明してくれた。私共もかつて褐藻のこの酵素の研究をただけに興味深く聞いた。*Sorghum* ではこの酵素活性は高く、また2個のアイソザイムが存在し、活性中心はグルコース-6-リン酸 (G6P) やグリシン (Gly) と結合賦活される側と基質 (PEP) を結合する側の2ヶ所あり、またこの酵素は低温失活性 ($1-4^{\circ}C$ の方が $30^{\circ}C$ より不安定) を示し、G6P や Gly 添加で安定化する。活性中心にはリジン基が関与しているらしい。同グループの魏家綿氏から



黄海水産研究所の横門の前にて
中央：紀明侯海洋研究所化学部長，左端：過紹武
研究所員，紀氏の右隣：張廷序加工室主任。

は、葉緑体破片を用いた光リン酸化の研究を聞き、また邱国雄氏 (この人は日本語が上手) からは活葉樹の真の光合成量の改良測定法の説明を聞いた。

最初宋氏との話で感じたことだが、この研究所は日本の1級クラスの大学と同等の設備もあるし、かなり高い研究レベルのようであるが、ここから出される文献などは日本へは余り送られていないことは残念である。中国でも日本同様に (ただしソ連の文献などは日本より多いようだ)、欧米の研究には十分注目し、逸速くその成果を採り入れているようであるが、日中間のこの種の交流が少ないことは事実である。日本もやはり漢字の国であるから、もっと中国語の勉強を普及して、中国語を読めるようにすべきかもしれない。

上海では、植物生理学研究所見学のほかに、博物館や友宜館、予園、古寺そして夜の雑技見物などに連れて行って貰った。通訳兼案内係は、昨年春上海師範大学日本語科を卒業したての開建偉さんという若い人で、中国では学卒の初任給が50元 (日本の6500円相当) であることもこの人から聞いた。日本語の勉強が熱心のように、見送ってくれた空港での待ち合わせしている時間にも、日本語問題集中の解答のことなど私に執拗に質問した。
(東京教育大学名誉教授)